

一 筆者の言語技術としての〈発想〉

説明的文章の指導では、従来、ほとんどが〈事柄読み〉か〈構成読み〉に終始していた。筆者がなぜその文章を書くに至ったのか、という文章制作の動機・目的に眼を向けた指導が顧みられることはなかった。また、なぜその題材に着眼したのか、にも眼を向けられることはなかった。筆者には取り上げたその題材への驚きや発見があったからこそその文章を書こうとする動機・目的が生じたはずなのである。

そこで私は以前から筆者の題材への着眼、そこに現れた筆者独自のものの見方・考え方を筆者の〈発想〉と捉えてその指導を積極的に行っていくことを提唱してきた。この筆者の〈発想〉を、私が提唱している「言語技術Ⅰ」（書き手が文章中で駆使している言語技術）の中に位置づけていくことを提案した。本誌の前号でも筆者のこの〈発想〉という言語技術を具体的に取り出して提案した。

〈発想〉とは、さまざまなもの・ことの中から価値ある独自の発見を行うこと、独自の着眼点（＝眼の付け所）を持つことである。この〈発想〉という心的な過程は、主要には、①文章制作の動機・目的、②価値ある題材への着眼点として作用している。これらを文章の中から目に見える形で取り出す際には、①文章題（＝題名）の付け方、②題材を効果的に展開していくための説明の仕方、印象づけるための記述の仕方などの言語技術として押さえていくことが可能である。本誌の前号では、「すがたをかえる大豆」「ウミガメの命をつなぐ」「幻の魚は生きていた」の三つの教材からそれぞれ筆者の〈発想〉という言語技術を取り出してみた。

そこで、本号では、この筆者の〈発想〉という言語技術（＝「言語技術Ⅰ」）を学習者に読み取らせるための教師の

言語技術(Ⅱ「言語技術Ⅲ」)について提案してみよう。

前号で三つの教材から取り出した筆者の〈発想〉(Ⅱ取り上げた題材への着眼)には、先人の知恵に対する驚きや発見、仕事に対する工夫と努力、奇跡に近い事実を知った衝撃と喜びなどが題名の付け方や記述・説明の仕方といった言語技術として出現していることを明らかにした。

これらの筆者の〈発想〉という言語技術を学習者に読み取らせるには、やはり、筆者がその題材に着眼しそれを説明しようとするに至った動機・目的に寄り添う形で、筆者の驚きや発見、喜びを共有させていくような〈読み〉を求めべきである。したがって、指導に際しては、記述されている事柄やその構成の仕方を正確に読解させる行き方ではなく、筆者が題材に対して抱いた驚きや発見、喜びに対する学習者一人ひとりの興味・関心や驚き、共感に沿った〈読み〉を促すような問いかけを工夫すべきであると考えられる。

二 「すがたをかえる大豆」の〈発想〉を読み取らせる教師の言語技術

この教材における筆者の〈発想〉は、「すがたをかえる大豆」という題名そのものに端的に表れている。「すがたをかえる」という擬人法の表現から、大豆という植物に先人がさまざまに手を加えて美味しく食べられるように工夫を凝らしてきたことへの筆者の驚きや発見を読み取っていくことができる。

そして、先人の工夫の中には、元の大豆の姿を想像することのできないような加工の手が加えられているものもある。そこで、誰にでも分かる大豆食品と、見ただけでは大豆食品と分からないようなものを区別させるような問いかけが必要となる。文章中には、必ずしも目で見て大豆食品と分かるようなものから順に説明されているわけではない。二番目に紹介されている「きなこ」は粉にひいてしまっているので、見ただけでは分からない。「大豆にふくまれる大切なえいようだけを取り出して」作られた「とうふ」も見た目では大豆食品とは分からない。

この文章では、「わかりやすい」大豆食品を加工の仕方のレベルから列挙して説明しているのである。しかし、右のように見ただけでそれと分かる大豆食品とそうでないものとの区別という分け方もある。

「とうふ」や「みそ」「しょうゆ」といった大豆食品に対しては、子どもたちの受け止め方が「に豆」や「なっとう」

に対する受け止め方と異なることが予想される。そこで、筆者の大豆食品についての先人の知恵に対する驚きや発見に共感を促す発問として、「すがたをかえた大豆の中で、特に驚かされたものはどんなものでしたか。」という問い掛けが考えられる。

また、筆者がこの説明文を書いた動機・目的に迫らせるために、「筆者がこの文章を書いたのは、どんな目的があったのですか。」(大豆のよいところに気づいて工夫をこらし、食事に取り入れてきた先人の知恵におどろかされたから。)とか、「このように、大豆をいろいろな食品に変えてきたことを、筆者は何と言っていますか。」(昔の人々のちえ)といった問い掛けが考えられよう。

三 「ウミガメの命をつなぐ」の〈発想〉を読み取らせる教師の言語技術

この教材における筆者の〈発想〉もやはり、「ウミガメの命をつなぐ」という題名に端的に表れている。特に「命をつなぐ」という語句の用法には、名古屋港水族館の飼育員であり、ウミガメの飼育と研究に携わっている筆者達の工夫と努力の様子を伝えたかったという、この文章制作の動機・目的が表されている。

要するに、ウミガメの飼育員である筆者達の工夫と努力を端的に表している言葉が「命をつなぐ」という言葉なのである。この言葉を手掛かりに筆者達の工夫と努力の様子を共感的に読み取らせていくことが筆者の〈発想〉に迫る指導とならう。

そこで、まず、「つなぐ」という語句の意味を検討しておくことが必要とならう。「つなぐ」には、「離れないようにする」「絶えないようにする」という意味があることを確認しておきたい。次に、「つなぐ」の用法についても考えさせておくとよいだろう。「手をつなぐ」「糸をつなぐ」「犬をつなぐ」「望みをつなぐ」といった用法を子どもたちから引き出せるとよいだろう。特に、「望みをつなぐ」という用法から、「ぜつめつのおそれがある動物」であるウミガメを守っていかうとする筆者達の望みを達成するための工夫と努力の姿を想像させていくことも可能とならう。

また、筆者達の工夫と努力を共感的に読み取らせるための問いかけとして、「ウミガメの命をつないでいくために筆者達が取った工夫と努力の中で、特に興味を抱いたこと、驚かされたことはどんなことだろう。」といった発問が考え

られる。この問いかけから、「水族館の人々が人工の砂浜を作ってウミガメにたまごを産ませかえさせたこと」「子ガメにタグをつけること」「日本で放流したウミガメがアメリカの海岸で見つかったこと」といった共感的な読み取りが期待されよう。

四 「幻の魚は生きていた」の〈発想〉を読み取らせる教師の言語技術

この教材における筆者の〈発想〉は、「絶滅したはずのクニマスが生きていた」という奇跡に近い事実を知ったその驚きと喜びにある。その驚きと喜びを読者に伝え共有したいとすることである。それは、題名に「幻の魚は生きていた」という新聞記事のトップ見出しをそのまま使用しているところに表れている。「幻の魚」という語句の使用も筆者の衝撃の大きさを伝える言語技術と見なせる。

この驚きと喜びを効果的に展開していくために、筆者は「幻の魚」クニマスが生きていたわけを〈謎解き〉の手法を用いて記述している。この手法を支えている筆者の言語技術が本文の四箇所で使用されている〈設疑法Ⅱ問いかけ法〉である。これらの四つの設疑法に気づかせていく問いかけが必要となる。これら四つの設疑法から、生徒達には、魚類学者としての筆者の研究的な〈推論・論証〉という姿勢を読み取らせることが可能となろう。

まず、最初の問いは、「クニマスが生きていたという事実を知った驚きと喜びから筆者はどのような疑問を抱いたのか。」である。①「クニマスはなぜ田沢湖で絶滅したのだろうか。」、②「絶滅したと思われていたクニマスがなぜ遠く離れた西湖で生きていたのだろうか。」という二つの疑問が読み取れる。

次に、「これら二つの疑問に対する解答はどんなものであったか。」である。

この解答に対して、「これで、クニマスが生きていた疑問は完全に解き明かされたのか。」と問いかける。③の疑問として、「どうして浅い西湖で命をつないでいたのだろうか。」という筆者の問いかけが出ている。

筆者の最後の問いかけとして、④「この西湖でクニマスがこれからも生き続けるためには、どうすればよいだろう。」という大きな疑問が投げかけられている。この解答として、「産卵場所も含めた湖全体の環境を守ること」「かつての田沢湖のように、人と物がつながり合った関係を維持すること」ということを読み取らせておきたい。